

四七二 余、頃、諸生の為に、明儒劉戡山の著はす所の「人譜」なるものを講ず。

余頃爲「諸生」講「明儒劉戡山所著人譜者」

【訳】私はこのごろ、塾生のために、明の儒学者の劉戡山（劉念台）の著した『人譜』というのを講義した。

四七三 戡山劉子、嘗つて平生の学ぶ所を括り、諸経の要を撮り、周子の「大極図説」に倣つて、「人極図説」を作る。因つて此の書を著はし、以つて入道の工夫を示す。

戡山劉子、嘗括「平生之所學、撮「諸經之要、倣「周子大極圖説、作「人極圖説、因著「此書「以示「入道之工夫、

【訳】劉念台は、ふだん学んでいることを総括し、四書五経の重要なところを取り出して、周敦頤の著した「大極図説」に倣つて「人極図説」を作った。それで、この書を写し、人の生き方を教えた。

四七四 此の書、寥寥たる一小冊といへども、綱挙目張、本末内外一以つてこれを貫く。而して自訟慎独、説き得て微に入る。先生の人となるの心は、惟これを至れりと為す。

此書也雖寥寥一小冊、而綱舉目張、本末内外、一以貫之、而自訟慎獨、説得入微、先生爲人之心、惟之爲至。

【訳】この書はページ数の少ない小冊子ではあるが、大綱もあげられて、細目も整い一貫した論理が展開されている。そして、自分の非を認め、一人を慎むことの本質にせまっている。先生が、人としてのあり方を説かれる心は、ただこのことである。

四七五 学ぶ者苟くも熟読して、得るあれば、則ち復た多くは書を読まずとい

へども、以つて先聖の旨を覺りて、自ら慊らざることなかるべし。

一

學者苟熟讀、而有得焉、則雖不復多讀書、而可以覺乎先聖之旨、而無不自慊矣

【訳】学ぶ者がもし熟読して、すたとわかれば、その上に多くの書物を読まなくても、先聖の言わんとするところを覺つて、自分で満足するものだ。

四七六 有明三百年、賢儒輩出し、學術異動多し。最後に劉子世に出で、斟酌調停して、尤も其の粹を得たり。而して劉子の著、是れ又其の尤も粹なるものにして是れ余の平日敬服して信嚮するゆゑんのものなり。 丑九月十七日、録して諸生に示す。

有明三百年、賢儒輩出、學術多異動、最後劉子出世、斟酌調停、尤得其粹、而劉子之著、是又其尤粹者、是余之所_レ以平日敬服而信嚮者也、 丑九月十七日、録示諸生

【訳】中国の明朝の時代三百年、優秀な学者が輩出した。学説の異なるものも多い。しかし、最後に劉子（劉念台）が世に出て、照合、取捨して混じりけなく最も選びぬかれた良質で優れたものとなった。それで、劉氏の著書は、最も良質で優れたもので、私には常日ごろから敬服して、心に響くものがあり、共感するのだ。

丑九月十七日、録して諸生に示す。

四七七 宋末の隱士眞山民、嘗て田家の詩ありて云ふ、「地罌に芋栗を煨き、貴人をして知らしむるなかれ」と。余毎に此の句を誦し、深く其の幽趣を愛して已まず。

宋末隱士眞山民、嘗有_二田家詩_一云、地罌煨芋栗、莫遣貴人知、余毎誦_二此句_一、深愛_二其幽趣_一不已、

【訳】宋の時代の終わりの隱者であつた眞山民は、田舎を詠んだ詩でこう言つた。「土間の炉で、芋や栗を焼いて食する。そのおいしさは、高い身分の人たちにはわからないだろう」と。私は、常々この句を誦し、その奥深い趣を深く愛してやまない。

四七八 今夫れ王公大人の、平生享くる所の膏梁の味、膾炙の美、珍羞盛饌、備はらざる所なし。何の山間樵夫の食を羨む所ぞ。而るに樵夫の徒、還た其の旨を秘し、貴人のこれを知らざるを幸ふ。真に一笑を發すべし。

今夫王公大人、平生所享之膏梁味、膾炙之美、珍羞盛饌、莫所不備、何所羨乎山間樵夫之食、而樵夫之徒、還秘其旨、幸貴人之不知之也、真可發一笑、

【訳】この時、王や貴族高位高官の人々は、常日ごろ肉やお米のおいしいご馳走、膾炙や炙り肉のおいしい物など珍しい豪華な料理を食べていて、準備されていないものはない。どうして、田舎の樵夫の食事など羨んだりしようか。だのに、樵夫の中には、山間の食事のおいしさを秘密にして、貴族高位高官の人たちが、これに気づかないことを願うなんて、笑うべきことではある。

四七九 然りといへども王公貴人は、則ち毎に飲食流連し、酔飽度を過ぐ。いはゆる「五味は人の口をして爽はしむる」ものなり。何ぞ以つて天下の味を言ふに足らん。而るに山人野僧、閑に投じて相招き、溪橋を渡り柴扉を叩き、地蘆松火、澗実園蔬、天真の雅味を喫し、村酒の下物を供し、古今を談じ、詩文を評し、以つて一時の興を遣る。其の輕快妙趣、別に一箇の天地あり。而るに固より夫の貪味富貴躁熱の子弟輩の能く夢想する所にあらざるなり。

雖然、王公貴人、則毎飲食流連、酔飽過度、所謂五味令人口爽者、何足以言天下之味、而山人野僧、投閑相招、渡溪橋、叩柴扉、地蘆松火、澗實園蔬、喫天真之雅味、供村酒之下物、談古今、評詩文、以遣一時之興、其輕快妙趣、別有一箇之天地、而固非夫貪味富貴躁熱子弟輩之所能夢想也、

【訳】そうだと言っても、王や身分の高い人は、飲み食いや遊びにふけり、度が過ぎるほどに酔っ払い、たらふく食べている。老子言うところの「様々な味は、人の味覚を狂わせる」ものである。だから、どうして世の中の食べ物の味について言うことができるのか。山人(世を捨てて山に隠れ住む人)や野僧(いなかの僧)が暇に任せて招きあい、谷の橋を渡って、柴の戸を叩き、囲炉裏でたいまつを燃やして、木の実や野菜等自然のおいしい物を食べ、地酒の肴を出し合って、昔話をし、詩文を評論して一時を楽しむ。このような快い素晴らしい趣は、別天地のようである。しかし、このことは味を貪り、裕福で、忙しい王や身分の高い人たちには、夢想だにできないことである。

四八〇 然らば則ち山民さんみんの此の句、独り余これを愛して已やまざるのみならず、天下又自おのずから会心の人あらん。 丑九月二十七日、録して書生に示す。

然則山民此句、不獨余愛之不巳、而天下又自有會心之人矣。 丑九月廿七日、録二示書生、

【訳】 そうであるなら。真山民のこの句は私だけがこれを愛して已まないのではなく、天下にはまた同感する人々があるだろう。

丑九月二十七日、録して書生に示す。

四八一 天地四方これを宇と謂いふ。往古來今、これを宙と謂いふ。

天地四方、謂二之宇、往古來今、謂二之宙

【訳】 東西南北、上下左右の全空間を宇という。過去現在の続く時間を宙という。

四八二 宇宙の間、惟ただ此の一理あるのみ。此の理の外ほか、更に何事かあらん。

宇宙之間、惟有二此一理而已、此理之外、更有二何事、

【訳】 宇宙は、一つの秩序ある理に貫かれてている。この理の他には、秩序あるものはない。

四八三 天、此の理ありて、而る後運行常つねあり。地、此の理ありて、而る後發生窮まらず。風雨霜雪、此の理ありて、而る後順序差たがはず。其れ然り而して後、造化の功成る。

天有二此理、而後運行有常、地有二此理、而後發生不窮、風雨霜雪、有二此理、而後順序不レ差、其然而後造化之功成矣、

【訳】 天は、この秩序原理があるからこそ、恒常性がある。大地は、この秩序原理があ

るからこそ、植物が生育し続ける。さまざまな氣象変化は、この秩序原理があつて、違えることなく順番にめぐる。そして、万物の創造変化がなしとげられるのだ。

四八四 人は、氣を天地の間に受く。已に此の形を有し、又此の心を具して以つて生ず。而らば心の理、亦同じからざることをあるなく、一ならざることをあるなきなり。

人受氣乎天地之間、已有此形、又具此心以生、而心之理、亦莫有不同也、莫有不一也、

【訳】人は、身体を天地の間に受けている。だから、生まれながらにしてこの形をもち、また人格も備わっている。そうであるから、人格のあるべき姿は、みんな同じで、一つだ。

四八五 心の理、苟くも内に明らかなれば、則ち喜怒哀樂、各其の節を得て、身修まり家齊ふ。推して外に施せば、則ち刑賞黜陟、皆其の当を失はず。而して国と天下と、以つて勧め以つて懲らし、億兆の衆、協且つ和ならざるはなきなり。

心之理、苟明於内、則喜怒哀樂、各得其節、而身修家齊、推而施於外、則刑賞黜陟、皆不失其當、而國與天下、以勸以懲、億兆之衆、莫不協且和也、

【訳】その人自身の考え方が明らかになれば、喜怒哀樂などの感情の表れはそれぞれ節度にかない、身は修まり、家は斉う。それを社会に適用したならば、罰したり誉めたたえたり、功績のあるものを大事にするなど、みんなその妥当性を失わないということ。その結果、国や世の中は、善を勧め悪を罰し、万人はみんなで尊重し仲よくなるだろう。

四八六 聖人の明、夙に此を見るあり。因つて専ら力を此に用ふ。四書六経の学、是れによりて以つて興る。吾人の当に信従すべき所のものなり。丑十月初七日、録して書生に示す。

聖人之明、有夙見乎此、因專用力於此、四書六經之學、由是以興、吾人之所當信

従_二者也、 丑十月初七日、 録_二示書生

【訳】聖人が明らかなことは、早くからこのことを理解していた。したがって、これにこそ力をここに用いていた。四書六経の学問は、これによって興った。これこそ、私が信じて従っていることである。